

クリニカルカンファレンスおよびシンポジウム

異なる生活背景を考慮した口に関わる支援

～反対咬合を認める思春期生活者のこころ～



石谷 徳人 (イシタニ小児・矯正歯科クリニック)

略歴

1998年3月 鹿児島大学歯学部卒業
 1998年4月 鹿児島大学歯学部小児歯科学講座入局
 2008年3月 イシタニ小児・矯正歯科クリニック開業

歯学博士
 日本小児歯科学会 専門医・理事
 鹿児島大学歯学部 非常勤講師

提示する生活者は、13歳5か月の男子である。受け口を治して欲しいとの希望で母親を伴い、当クリニックに来院した。顔貌所見では側貌で下顎の突出感とわずかな下口唇の突出を認めた。口腔内所見では正中偏位が上顎左偏1mm、下顎右偏4mmを認め、オーバークロス1.7mm、オーバージェット2.0mm、臼歯関係は左右共にアングルⅢ級、スピーカーブは4mmであった。またセファロ分析結果から、 $\angle ANB - 2.1^\circ$ 、 $\angle FMA 30.5^\circ$ 、KIX-index 1.5であった。以上から、骨格性Ⅲ級の反対咬合症例と診断した。

下顎の過成長も予想されたが、養育者である母親と生活者本人の非常に強い希望に対し、経過観察期間を設けず動的治療に入ることになった。そして治療管理中、生活者の家庭や社会環境に対して考慮せざるを得ない状況となり下表に示す経過をたどった。

今回、成長が著しい時期に骨格性反対咬合の動的治療を行ったことへの是非論も重要ではあるが、敢えて「思春期生活者のこころ」を通しての議論を中心に展開して頂ければと願っている。

